

12 江戸期本草家の北陸への関心(四)

藤沢光周と『奇草小図』について

正橋 剛 二

前回迄は、京都から訪れた山本溪山、紀州から来た畔田翠山、幕府から派遣された野呂元丈など、いずれも他国から来て立山の植生を調べた人々の記録について報告したが、今回は地元の人の中からもこれらに関心を持つ者が現われたことを報告したい。

越中富山藩校廣徳館の教師藤沢光周〔文化三(一八〇六)―元治元(一八六四)年〕の人物像とその著書『奇草小図』に関し、現在はほとんど知られていない。彼は医師でも本草家でもなく、漢学者ないしは儒者であった。この点、彼は既報の三人とは異り、上野益三氏のいう(日本博物学史)アマチュア博物学者に分類される人物であろう。

藤沢家のもと越前朝倉氏の家臣であったが、主家の滅

亡から浪人し、加賀藩三代前田利次に召抱えられ、富山藩分藩に伴い富山へ移った。初め家禄一五〇石、後一〇〇石、さらに減じ四〇俵となった。父、藤沢音人の時から廣徳館監生を勤めた。音人には長男長周(ながかね)と次男光周(みつかね)があり、兄省吾長周は文政五年、父の跡式を受け廣徳館訓導になったが、五〇歳を過ぎて家督を弟に譲り、醍醐村(現在の京都市山科区)へ移住した。藩のため秘かに京都の情報を集めたいが、この時期は明かでない。

若くから部屋住みだった光周は登山を好み、山で見る珍しい植生、すなわち異草・奇草に心を惹かれ、次第に傾斜を深めていた。一方、藩主利保は、江戸の本草愛好者の集まり「緒鞭会」のリーダーであったが、弘化三(一八四六)年隠居により帰国し、大著『本草通串』ほかの刊行に取りかかる。以後、光周は軽輩ながら利保の身近に侍ることになったようである。利保四七歳、光周四一歳の頃である。

嘉永六年三月二二日(新暦の四月二九日にあたる)利保は家臣を従え、領内最高峰の金剛堂山(標高一六三八米)

に採葉登山を試みたが、現在そこには記念碑が残されている。碑面に刻む「登山扈從之近臣」一五名の中に「藤沢音人光周」が名を連ね、この頃光周は父の名音人を襲名していたことを示している。

竇草小図は序文によると嘉永甲寅（七年）秋の出版で、右主従登山の一年半後のことである。利保の薫陶を受け、また慈憊されての上梓と推定する所以である。

本書は天・地・人三分冊の構成でタテ一〇糎、ヨコ一糎九糎の小型懐中本で、冒頭の見開きに自序「竇草小図引」があり、七字詰一八行、総字数一二二字の簡潔なものだが、典雅な隸書体で書かれ、四九歳の著者の心境と発行への動機など、甚だ要領を得ている。天之巻は序文一丁、本文三六丁、品名七二種（各紙面一面に植物一種を描き品名を付す）。地・人之巻は各本文四五丁に同様品名九〇種を収め、合計二五二種が手彩色着色で示されている。惜しいかな奥付はなく、刊記を欠くので出版の詳細は不明だが、当時の富山町でこのような出版は十分可能であった。光周の私家本として、少数数が作られ、友人・知己を中心に贈られたものであろう。限られた地域の少数の人

にのみ配布された故、本書は世に埋もれてしまったとみられる。

本書に関し演者が最も強調したいのは、わが国で発行された最初の高山植物図鑑と見て間違いない、ということである。著者は多年反復して立山に親しんだ故、立山植物図譜の観もあり、特に現在のチョウノスケソウやコマクサの分布と較べて甚だ興味深い。これより先、悪天候に禍いされた溪山や、長途の旅の後半でやゝ疲労を感じさせる翠山の記録等に較べ、内容は一段と豊富である。

演者は学問的な系譜を探るため、特に品種の掲載順序に関心をもつて調べたが、これ以前のどの書物とも関連や影響はなく、全く光周独自の配列としか思えなかった。この点、彼のアマチュアとしての限界を示している事実かとも思う。

（口演発表時には資料小冊子を配布し、これについて説明する。）

（医）白雲会